

高岡市立博物館に親しむ会

KA JI MARU 鍛 冶 丸

第15号

令和4年
3月



博物館を支える市民の力ー

「博物館に親しむ会」誕生を振り返ってー

高岡市立博物館に親しむ会 副会長
高岡市立博物館 元館長 晒谷 和子

私が博物館へ異動したのは平成19年(2007)4月。7月のリニューアルオープン控え、構想を練っている真最中であった。方針の骨格決定、原稿作成、業務内容の精査、発注、入札、委託会社の決定、成果品の点検と訂正など突貫工事に3か月半余りを費やし、無事21日のオープンを迎えた。

新装なった博物館へ足を運んでくださるお客様はそれなりに多くはなった。とはいえ他館の入場者数とは比べものにならず、誠に残念であった。加えて、館主催の郷土学習講座に県で最もご活躍の講師をお迎えしても、受講者が極めて少なかった。看板を立て、チラシを配布しただけでは情報が市民の手に届かない。開催日が月初めだったこともあり「市民と市政」に目がいかなかったのであろう。何とかして市民に博物館の存在を周知したいと思い馳せた。

さて翌年2月、高岡市立博物館協議会が開催された。当時委員であった竹中勝治氏が「美術館に友の会があって、市民も協力している。博物館でも会を作ればどうか」。また小野田裕司委員は「博物館に立派な茶室・松聲庵があるのにあまり使われていない。この活用を図ってはどうか」とのご意見をだされた。他の委員からも多くの貴重なご提案・ご意見をいただいた。

すぐに出来ることからと思い立ち、近藤昭美先生にお越し同年11月呈茶の会を催す運びとなった。茶道の力と先生の魅力を縁に、多くの方々が博物館へお見えになるようになる。

美術館は平成6年(1994)に現地の高岡高校跡地

に移転するまで、現博物館の本館部分(1951年設置)で、博物館が新館部分(1970年設置)であった。市民組織は「高岡市立美術館友の会」と「高岡市立美術館・博物館に親しむ会」があった。移転に伴い組織を改変し、「高岡市美術館友の会」となって美術館に市民応援団が付随した経過がある。委員のご意見から是非、博物館に市民組織をと、他館の規約を取り寄せ比較検討しながら案を練った。ところが重い腰がもう一つ上がらない。

平成21年(2009)は高岡開町400年の記念すべき年であり、前後3カ年は郷土学習意欲に燃える市民が続々と博物館を訪問された。入館者が驚く程に増加し、その対応に明け暮れる嬉しい日々が続く。

飛んで平成25年(2013)2月、ステージ3の大腸がん、5年生存率50%と診断され、3月11日に手術となった。私は崖っぷちに立たされた。手術後の回復が遅れば市民組織を作る意欲は出てこないだろう。作るなら今しかない。日頃から博物館を愛しご尽力下さっている、飛見立朗氏、多田慎一氏、神保成伍氏、近藤昭美氏、太田久夫氏、水野俊雄氏、樽谷雅好氏の皆様に相談したところ、「それはいい!」と諸手を挙げて大賛成。発起人7名で、3月6日の設立総会に漕ぎつけた。

あの感動的な日から9年が経過し改めて振り返ると、今日の博物館事業の隆盛は「親しむ会」の皆様のお力があればこそ”であります。深く感謝申し上げますとともに、市民の博物館として益々のご指導ご協力をお願い申し上げます。

頓首再拝
(さらしや・かずこ)

伏木小学校と舞「かたかごの花」

高岡市立博物館に親しむ会 広報部会員 土肥 慶一郎

歴史都市高岡は、万葉のふるさとと言われて久しい。特に私の母校、高岡市立伏木小学校は、万葉集とその編者とされる大伴家持を素材として、教育課程や学校行事に取り入れ親しみをもって学ぶ環境づくりに、全校一丸となって古くから努めて来られた。

伏木小学校は、学制発布の翌年、明治6年(1873)2月16日に伏木の先覚者 藤井能三^{のうそう}氏が、招へいした教員の給料や教材などを手配し、校舎は私宅の一部を充て、すべてが私財をもって創校された。このことから、現在も、伏木小学校を「能三さんの学校」と親しみを込めて卒業生と伏木の住人が呼ぶ所以である。



伏木小学校校庭を臨む藤井能三氏銅像（撮影：筆者）

舞「かたかごの花」誕生物語は、次のようである。昭和28年(1953)、伏木小学校創校80周年記念式典において、舞踊に振りつけられた万葉集の一首「かたかごの花」（作曲は黒坂富治 富山大学教授）が初めて発表された。以後、現在まで絶えることなく、小学4年生10名が、前年度出場の児童と地元の日本舞踊の先生のご指導のもと特訓を重ね当日を迎え、見事に大役を果たすようである。

令和3年(2021)4月2日、高岡市万葉歴史館の常設展示室が「万葉体感エリア」にリニューアルオープンした際には、舞「かたかごの花」メンバーの10名がこけら落としに華を添えたとのことである。

改めて万葉集の「かたかごの花」を紹介したい。(高岡市万葉歴史館編『越中万葉百科』)

かたかごの堅香子草の花を攀ぢ折る歌一首

(かたかごの花を引き折る歌一首)

もののふの 八十娘子らが 汲みまがふ

寺井の上の 堅香子の花 (巻19 4143)

(たくさんの少女たちが入り乱れて水を汲んでいる寺井のほとりに群がり咲いているかたかごの花)

望むらくは、学校統廃合を経ても、この素晴らしい舞「かたかごの花」が脈々と引き継がれることを。(どい・けいいちろう)



高岡市万葉歴史館「万葉体感エリア」オープンこけら落としでの舞「かたかごの花」(撮影：関隆司氏)

平米小学校と室崎琴月^{きん げつ}

高岡市立平米小学校 校長 高田 淳一

先日、高岡市立博物館で室崎琴月の生誕130年と「ぎんぎんぎらぎら」で始まる有名な童謡「夕日」誕生100年の記念展が開かれたことを知った。

室崎琴月は、本校区の高岡市木舟町の出身であり、校歌は琴月の作曲である。興味をもち、市内の小中学校の校歌をどれくらい手がけているのだろうと調べてみた。本校以外では、西条小、南条小、川原小、博労小、旧東五位小、旧石堤小、こまどり支援学校などの校歌の作曲をしていたことが分かった。さすが全国2000校の校歌を作曲したといわれるだけある。

平米小学校の校歌の誕生は以下のような経緯であった。

昭和4年(1929)、平米小学校第3代校長 小林守直氏は、新しく校歌を作るにあたり、作曲はぜひ室崎琴月さんにと、東京に出向いた。作詞は、校長本人である。

琴月は、平米小学校の子供たちのために、家族の心配を余所に、毎日夜遅くまで作曲に取り組んだ。また、子供が歌いやすいような音域で、純朴に仕上げることを大切にした。さらに、作詞を担った校長の求めた子供像「正しき心」「やさしき心」「雄々しき心」(この3つの心は、現在も校訓となっている)をいかによいメロディで伝えるかに必死になり、何度も楽譜を書き直した。

掲載した校歌の楽譜を見ていただくとおわかりだろうが、音域は、一番低い音が「ド」であり、一番高くても、1回だけ出てくる高い「レ」である。子供が無理せず歌えるようになっている。また、楽譜を見て歌える方は感じ取れると思われるが、非常に単純で純朴なメロディに仕上げられている。入学式

や始業式、運動会、卒業式等の式典・学校行事にも合い、子供たちが大好きな校歌となっている。

平米小学校校歌

作詞：小林守直
作曲：室崎琴月



本校には、「おおとり歴史館」という創校100周年を記念して作られた部屋がある。大正時代から毎年残してきた卒業生の図画作品や毛筆作品、昔の道具等が陳列されている。琴月の肖像画や人物史も、御馬出町生まれでアドレナリンの発見で有名な高峰譲吉とともに紹介されている。社会科や生活科、総合的な学習の時間で我が地区の偉人について学べるのはとてもありがたい。2年生の生活科で町探検をすることが多いが、縁戚であった「土蔵造りのまち資料館」も見て、平米校区を学習し、地域への愛着を深める。

平米小学校は、令和4年4月に定塚小学校と統合し、高陵小学校として出発する。定塚小学校出身の漫画家 藤子不二雄とともに、室崎琴月、高峰譲吉の業績を紹介するコーナーを設置し、いつまでも地区自慢の偉人であることを伝えていきたいと考えている。

(たかた・じゅんいち)

「夕日」百年

高岡観光ボランティアガイド「あいの風」代表 中井 明子

「ぎんぎんぎらぎら夕日が沈む んぎんぎんぎらぎら、、、」小さい頃や、子供をあやしながら歌った歌「夕日」が作曲されて、令和3年(2021)が100年目とのこと。歌いやすく情景が伝わる「夕日」の歌の作曲家 室崎 琴月さんが、高岡出身ということは、あまり知られていないのではないのでしょうか？

私自身、観光ガイドの勉強会の時に、山町筋にある土蔵資料館が室崎家の本家で、その分家が琴月さんの生家であると知りました。その「夕日」を題材に、北陸銀行の横の末広坂小公園に「夕日」の子供たちの像が出来たのは、昭和58年(1983)です。翌年から、北陸銀行の職員の方が、子供たち9人に浴衣を着せたのが衣装の始まりで、そのあとしばらく中断。平成19年(2007)「ロマンス会」の方が、平成24年(2012)より私たち「さくらグループG」が、引き継いでいます。両手を挙げているかわいい子供たちの「ぎんぎら像」に季節にふさわしい衣装を着けて、道ゆく市民や観光客に楽しんでもらっています。昨年度と今年度の夏の衣装の時は、新型コロナウイルス感染を考え、坂の下保育園児の歌や踊りは披露出来ませんでした。少しでも道ゆく人に、一時の安



岩野勇三《ぎんぎんぎらぎら》(1983)

らぎ、気晴らしを感じてもらえたらと思い、会員で浴衣を着せました。私たちのグループ名は、おもてなしグループ「さくらG」です。夕日の像の前を通るとき少しでも“おもてなしの心”が伝わればと思ってやってきました。また、私自身、観光ガイ

ドで、市民の皆さんや観光客の方に室崎琴月さんの生家の前を通る時に琴月さんの話をします。残念ですが、30歳代より若い方は「夕日」の歌は、ご存じありません。でも、「夕日」の歌を口ずさんだりすると、「歌いやすい覚えやすい歌ですね。懐かしい気持ちになります」との言葉をもらいます。



私たちは“おもてなしの心”で、子供たちに衣装を作成しています。でも、10年近く続きますとグループが高齢化し、次の方に引き継ぎたいと思っています。この“おもてなしの心”の火を消すことなく、次の方にバトンタッチできればと思っています。バトンタッチOKの方、返事を待っています。“おもてなしの心”、小さいですけど、続けていこうではありませんか？ (なかい・あきこ)

「伏木往来を半分ほど(米島→江尻)歩く」に参加して

高岡市立博物館に親しむ会 会員 森 朝子

6月10日(木)、夏日と予想される中、14名が参加し、「米島」バス停に集合して、すぐに樽谷先生の地名についての話が始まりました。砺波市芹谷山千光寺の縁起に、神通力で飛ばした米俵の落ちた場所として「米島」が登場すると聞き、とたんに興味が湧いてきます。

その後、小矢部川の城光寺橋の手前を左折し少し行くと、米島の村落の旧道が見えました。橋がなかった頃、ここから渡し舟で対岸のお地藏さんの所まで行き来した「伏木往来」です。盲目の船頭さんのエピソードや、この地は洪水被害がよくあったことから、40年ほど前に、軒下に舟を備えた家を見たことを楽しく話されました。又、明治になって姓をつける時、「田」の字をつけたことから、米田・島田・新田・村田が多く、道沿いの表札を眺めて歩きました。

次はパチンコ店の側にある地藏堂です。200年ほど前、能登の力士が北海道行きの船に乗る途中に、雨ざらしの「おんぞはん」を見て気の毒に思い、相撲の優勝金でお堂を建てたそうです。暑くなり休憩を取りつつ、荻布から放生津往来に入りました。細く緩やかなカーブの旧道です。



地藏堂(米島)にて

そして、いよいよ私の中のメインのまないた俵板橋です。跡地は二上山を真向かいに、田んぼが広がる巾1.5m

位の草の茂る排水路で、水がちょろちょろと流れていました。悪王子伝説の理由は何？なぜ人身

御供の地に？人々の山への想いは？等々疑問が湧いてきました。(講座終了後、荻布天満宮に橋の石の一部が大切に保存されているのを見て、嬉しく思いました。)

ラストは江尻白山社へ。「江」とは用水、「尻」は最下流の意味とのこと。元は「観音寺」という修験道寺院で、のちに開発の「熊野神社」の神職になられたが、お墓は今も鳥居近くにありました。風が通る場所で記念写真を撮り、解散となりました。

汗ぐっしょりで解説して下さった樽谷先生、お世話下さった博物館職員の方々、ありがとうございました。(もり・あさこ)

まないた俵板橋から二上山を望む

江尻 白山社にて

「銅葺き」に町の風格を感じた

—水道建設を力説した上埜安太郎市長

雅楽団体洋遊会会長 上野 慶夫

かつて、今回の講師、樽谷雅好先生（私の元同級生でもある）から面白いことを教わった。

ある時、二人で地元の古い街道あとを探訪した。村と町の境目のようなところに道が二本並んでいる。どちらが古い街道なのか私は迷った。ところが樽谷さん、「東側の道が古い街道だ」と即座に判定された。理由は、「どちらの道も端に水路がついているが、西側水路は東側の水路より位置が高い。したがって、これはあとからできたもの。東側の低いほうが、古い水路と街道だよ」。新しい水路は他より高い位置にする、というのが昔から厳格なルールだったのだそうだ。

考えてみれば、それはもっともだ。水は低きに流れる。近くに低い水路ができると、元の水路はそちらに水を奪われて枯渇してしまうかもしれない。既得権を犯されるわけである。新しい水路は新しい水源で、高い位置につくってもらうのが安全だろう。歴史は人間と水との戦い、水をめぐる人間同士の争いに満ちている。こんなところでもそれがわかるのだと感心した。

今回は、その樽谷さんに案内されての、高岡の上水道遺跡探訪ウォークだ。高岡人と水との歴史発掘にいざ出発、ところが、雨にたたられて本当の「水との戦い」ムードにもなってしまった。

高岡やぶなみ駅から清水町へ向かって4つの源井（1号から4号まで、雨との格闘で回った順番は忘れた）そして配水塔。これは登録有形文化財だ。

途中、樽谷講師の解説、池に娘が落ちたとか、水底に大蛇が住むとの伝説も面白く聞いた。もっ

とも、全国いろんな観光地で同じような話を聞かされたような気もする。伝説というのは、所が違っても似たところがあるものだ。

印象的だったのは、ほとんどの源井の建物や配水塔が銅葺きだったこと、さすが高岡、その落ち着いた輝きにはなんとなく風格があった。作りも、「いい仕事してます。百年やそこらはしっかり使えます」という感じ。登録有形文化財になったのもうなずける。



清水町配水塔

さて、今回知ったところでは、高岡市で初めて上水道が実用化されたのは昭和6年(1931)、県下で2番目だった。それ以前の市民は水道の必要性をそれほど感じていなかったとのことだ。元来、富山県は日本一水の豊富な県、どんなところでも、井戸さえ掘れば飲み水ぐらいは事欠かない。水道などに目が向かなかったのも当然かも知れない。しかし、将来の産業社会を見据え、高岡市民に水

道の必要性を力説したのは大正から昭和はじめの市長、上埜安太郎さんとのことだ。樽谷講師もその功績をたたえていた。

上埜^{うえの}安太郎という名前は私には馴染みがある。わが上野^{うえの}家とはなんの関係もないが、私と同じ福岡町出身の方なのである。若くして自由民権運動に身を投じ、明治、大正期に長らく衆議院議員を務められた。中央政界でも大政党、政友会の重鎮だった。

上埜安太郎さんが大政治家であったことは、何と対立政党、民政党気鋭の衆議院議員だった松村謙三さんの『三代回顧録』に書かれている。

上埜安太郎さんと松村謙三さんが選挙で直接対決されたのは一度だけである。松村さんが国政デビューを飾った大正13年(1924)の総選挙だ。中選挙区制で、結果は双方とも当選された。ただ、その時の富山県は大雪のさなか、車はほとんど無く道路も未整備の時代で、選挙は難渋をきわめたらしい。

選挙が終わってから、上埜さんは松村さんに苦笑しながら冗談を洩らされた。「こうなると選挙はまったく国技館の相撲と同じだ。体力の争いではおれが君に勝てるわけではないじゃないか。もうこれでやめた」。“そのつぎの選挙から上埜さんはふつつり引退して、のちに高岡や富山の市長を務められたのである”と『三代回顧録』にはあった。

上埜さんは小柄な方だったそうだが、松村さんは老年になっても、身長170cmの私よりかなり背が高く、堂々とした方だった。お若い頃はさぞ体力十分の偉丈夫に見えただろう。お二人は年齢、政党こそ違うがもともと懇意な仲ということも記

されている。東京の新聞記者だった頃から松村さんは、上埜さんを郷里の大政治家として尊敬されていたらしい。案外、上埜さんのほうでも、「敵ながら頼もしい新人が出てきたな」という思いがあったのかもしれない。

このお二人が総選挙を争われたのは砺波と婦負郡を合わせた選挙区だが、高岡市より先に富山県で、(さらに言うと北陸地方で、)最初に上水道を建設したのは砺波市(当時出町)である。砺波市の人はそのことを結構自慢にしている。上埜安太郎さんは砺波市の経験から水道の有用性を痛切に感じられたのだろう。やはり、「先見の明」のあった方なのだ。

なんとなく感じた町の風格、そして先人の遺産、雨の中でも楽しい旅だった。(うえの・よしお)



清水町配水塔にて
(筆者は中央前から二列目)

● 令和3年度 高岡市立博物館に親しむ会 事業 ●



総会・講演会

講演「高岡と能美 一ながめてみよう両市の歴史―」

講師：鎌田康平さん（能美ふるさとミュージアム学芸員）

4/21(水)14:10～15:30

歩く博物館 講師：樽谷雅好さん（研修部会長）

座学「ゴールデンウィークに、主に県西部のお祭を堪能する」

5/19(水)10:00～11:30

第30回「伏木往来を半分ほど（米島→江尻）歩く」

6/10(木)10:00～12:00

第31回「一駅分歩いて、上水道の歴史を眺める」

10/13(水)10:00～12:00

第32回「成美校下の『路地』を2時間で…歩いて魅る」

10/27(水)10:00～12:00

版画講座 一木版画で年賀状を作ろうー 講師：水上悦子さん（理事）

11/11(木)、24(水)13:30～15:00

呈茶席 講師：小嵐晴美さん（ワークショップ部会長）ほか

4/17(土)、24(土)、5/15(土)、22(土)、10/9(土)、16(土)、23(土)、30(土) いずれも10:00～15:00

高岡古文書ボランティア（古文書の調査・整理）

4/17(土)、5/15(土)、6/19(土)、7/17(土)、10/16(土)、11/20(土)、12/18(土)、1/22(土)、3/19(土)（予定）

いずれも14:00～15:30

クリアファイルを作成しました！

おもて面は、前田利長書状と絵葉書「桜馬場の春色」の二種。裏面は高岡市立博物館外観写真です。令和3年度に登録した全会員に配布したほか、ミュージアムショップで販売しています。（一枚200円）



● 令和4年度 会員募集のご案内 ●

あなたも会員となって、郷土への理解を深め、市民に親しまれる新しい博物館づくりに参加してみませんか。

- 主な活動
- ・博物館の諸活動の協力、支援
 - ・高岡地域の歴史と文化に親しみ、互いに親睦を図る活動
 - ・ミュージアムショップの運営 ほか

- 年会費
- ・一般会員 1口 1,000円
 - ・賛助会員 1口 5,000円 *お一人さま 何口でも可

- 会員の特典
- ・企画展、特別展、講演会などのご案内
 - ・歩く博物館、走る博物館行事への参加、高岡古文書ボランティアでの活動、呈茶席などのご案内
 - ・会報誌「鍛冶丸」の送付・郷土学習講座等の受講料割引
 - ・図録の進呈（賛助会員のみ）

■申込方法

- 入会申込書に必要事項を記入のうえ、会費を添えて「高岡市立博物館に親しむ会」事務局へお越しください。入会申込書は「高岡市立博物館に親しむ会」のホームページに掲載しております。
- 郵便振込みをご利用の場合は、振込用紙『払込取扱票』に以下の項目をご記入の上、郵便局にてお振込みください。なお、振込手数料は各自でご負担をお願いいたします。※電信振替については、ホームページをご覧ください。

- ・口座記号：00760-8
- ・口座番号：100749
- ・加入者名：高岡市立博物館に親しむ会
- ・金額：年会費の金額
- ・ご依頼人：郵便番号、住所、氏名（ふりがな）、電話番号、性別、年齢

親しむ会では、各種部会のメンバーを募集しています。

1. 研修部会 事業企画、歩く博物館等サポート
2. 広報部会 会報誌「鍛冶丸」の作成
3. ワークショップ部会 呈茶席運営・サポート
4. 高岡古文書ボランティア部会 古文書の整理等



<編集後記>

第15号では、広報部会のメンバーから高岡の歴史・文化にかかる原稿を依頼しました。それぞれ、松原会員から土肥様、水上会員から中井様と高田様、四津井会員から晒谷副会長（会員名五十音順）にお願いしてご快諾賜りました。意義深く楽しい「歩く博物館」にも感想を寄せていただいています。ご執筆賜りました皆様に厚く御礼申し上げます。（SY）

令和3年10月から高岡市立博物館に勤務し、高岡市立博物館に親しむ会の事業をお手伝いしています。皆様が楽しめるイベントを多数開催しておりますので、ぜひご参加ください。（TY）

高岡市立博物館に親しむ会 会報第15号

■発行日 令和4年(2022) 3月15日

■事務局 〒933-0044 高岡市古城1-5 高岡市立博物館内
TEL 0766-20-1572 FAX 0766-20-1570
URL <https://www.e-tmm.info/> E-mail info@e-tmm.info